

プルーン・すもも着果調節等講習会資料

令和8年5月 JAグリーン長野営農販売部

◆生育状況

生育は、くらしまの満開が4月12日頃で、昨年より3日程度早い。ひょう害により一部地域で打撲、裂傷のひがいがあある。必ず自園を確認して、着果量確保を優先で作業を進める。

≪プルーン≫

1. 予備摘果・・・進んでいない場合は早急にすすめる

果実肥大は荒摘果をいかに早く済ませるかによって、最終的な果重に影響する！

特に着果量の多いツアー・スタンレイは予備摘果が重要になる。

生理落果が多い品種は、よく見極めて進める。(果実の色等)

2. 本摘果(仕上げ)の実際について・・・上枝に多く、下枝に少なめ

果実が親指大になった満開後50～60日頃で、6月上～中旬頃なる。

品種の特性(小玉の早生種から)樹勢の強弱(弱い樹から)さらに着果の多少(多いものから)を見ながら適正な着果数に仕上げる。

なお、プルーンは隔年結果するため、結実量が多い場合は特に適正着果に努める。

①小玉品種(アーリーリバー、ツアー、くらしま早生・サンプルーン等)

5cmに2果(3cm間隔)、1短果枝に1果(少ない場合は2個鈴成りにする)。葉枚5～8枚に1果。

②中玉品種(トレジディ、スタンレイ、ベイラー、ニューシュガー、くらしま等)

10cmに3果(3～5cm間隔)を目安に行う(2～3短果枝に1果)。葉枚10～15枚に1果。

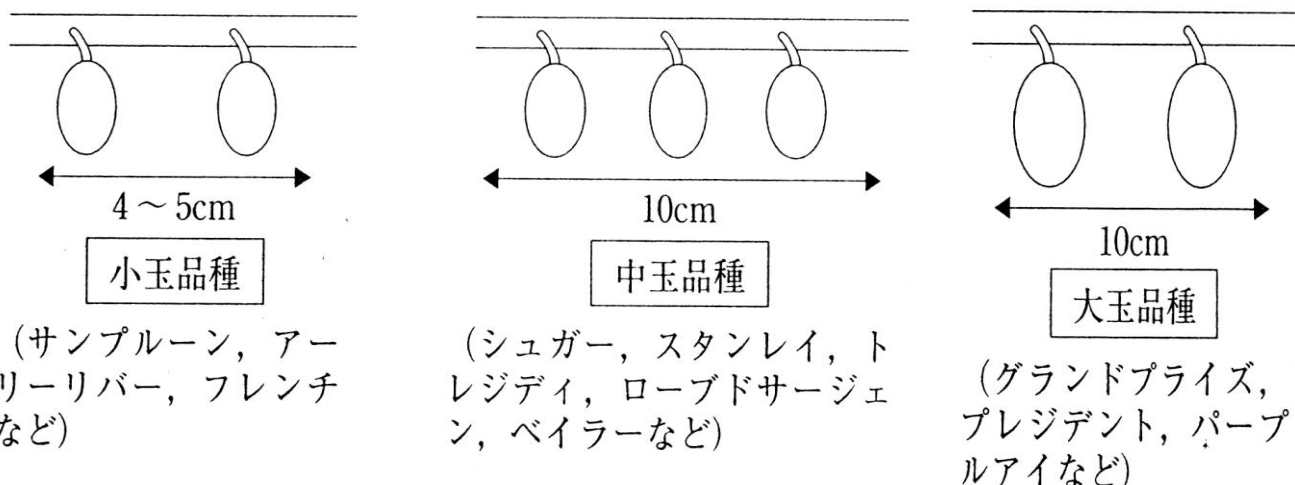
※くらしまは不受精果をしっかりと摘果し、無駄な養分消費を防ぐ。

③大玉品種(グランドプライズ、プレジデント、エドワーズ等)。葉枚15～20枚に1果。

10cmに2果(5～6cm間隔)を守る(3～4短果枝に1果とする)

(註)実止まりの悪い樹は多少の変形果・不良果(上向き)は残して樹勢の調節に役立てるが、梅雨に入る前頃不受精果(花かす付き)を取り除きサビ果や果実腐敗病の発生を予防する。

図1 【プルーンの仕上げ摘果の目安】



〈摘果の実際・残す果実〉 緑色が濃く、果梗が長く太く充実した大玉を残す。

- ①上向き果は風によるキズを受け易く、日焼けや果皮の荒れにつながるため、側方果や下向き果を残す。できるだけ枝からぶら下がるように着果させる。ただし、枝下の果実は薬液がかかからなくなるので注意。
 - ②比較的縦長な果実は、その後の肥大が良い。
 - ③サビ果は摘果するが、不足する場合は残す。また、全体的に着果不足樹は応急的に2つ成らせてもよい。
 - ④長果枝(2年枝)は小玉・奇形果になり易いため大玉果のみを残す。
 - ⑤果実同士が接触すると果粉(ブルーム)ののりが悪く商品価値が劣るので触れ合わないよう摘果する。
 - ⑥着果が多く弱った樹には、チッソの追肥を行う。
- ※果柄(台)が木化したときは摘果鋏を使うか、果帯部で摘み取り、果台部に傷つけない。
(傷痕にエチレンが発生し一時的に肥大抑制、生理落果を誘発する)

3. 新梢・樹体管理・・・徒長枝芽かき、摘心、捻枝、誘引、枝吊り

若木や強剪定をした樹、結実の悪い樹等では、強い新梢が発生しやすいので、樹冠内部が暗くなり、果実の品質や花芽分化に影響を及ぼし、病虫害の発生につながる。

- ①主幹、主枝、亜主枝の背面や剪定の切り口付近の不定芽や徒長的な新梢が発生してくるので、早めに芽かきをして整理する。
- ②太枝の背面から発生した強めの新梢等、翌年の結果枝や日焼け防止に利用したいものは5～7葉で摘心するか3節目をひねる捻枝を行う。いずれも5月下旬～6月初旬が適期である。
- ③誘引は立ち枝をねせる。樹液の流動が盛んになると枝がなじむので冬期剪定(樹形構成)の補正を兼ねて実施したい。着果の少ない強樹勢は特に留意する。
- ④主枝や亜主枝から強い新梢が発生し、混み合っている場合は、本数を減らすか、新梢を4～5本程度に残して摘み取ることにより、生育を抑制させると副梢が発生し、結果枝として利用することができる。
- ⑤果実が肥大するとともに枝が下垂し、そのまま放置すると、地面について病果の原因にもなる。また、樹形の乱れの原因にもなるので支柱を立てて防止する。

《すもも》

1. 予備摘果・・・早急に終わらせる

大石早生・ソルダムなど生理落果の少ない品種は最終着果量より2～3割多く残す。

サンタローザ・太陽のうち、とくにサンタローザは生理落果が多いので、予備摘果は後回しにし、最終着果量より3～4割多く残す。

2. 仕上げ摘果について

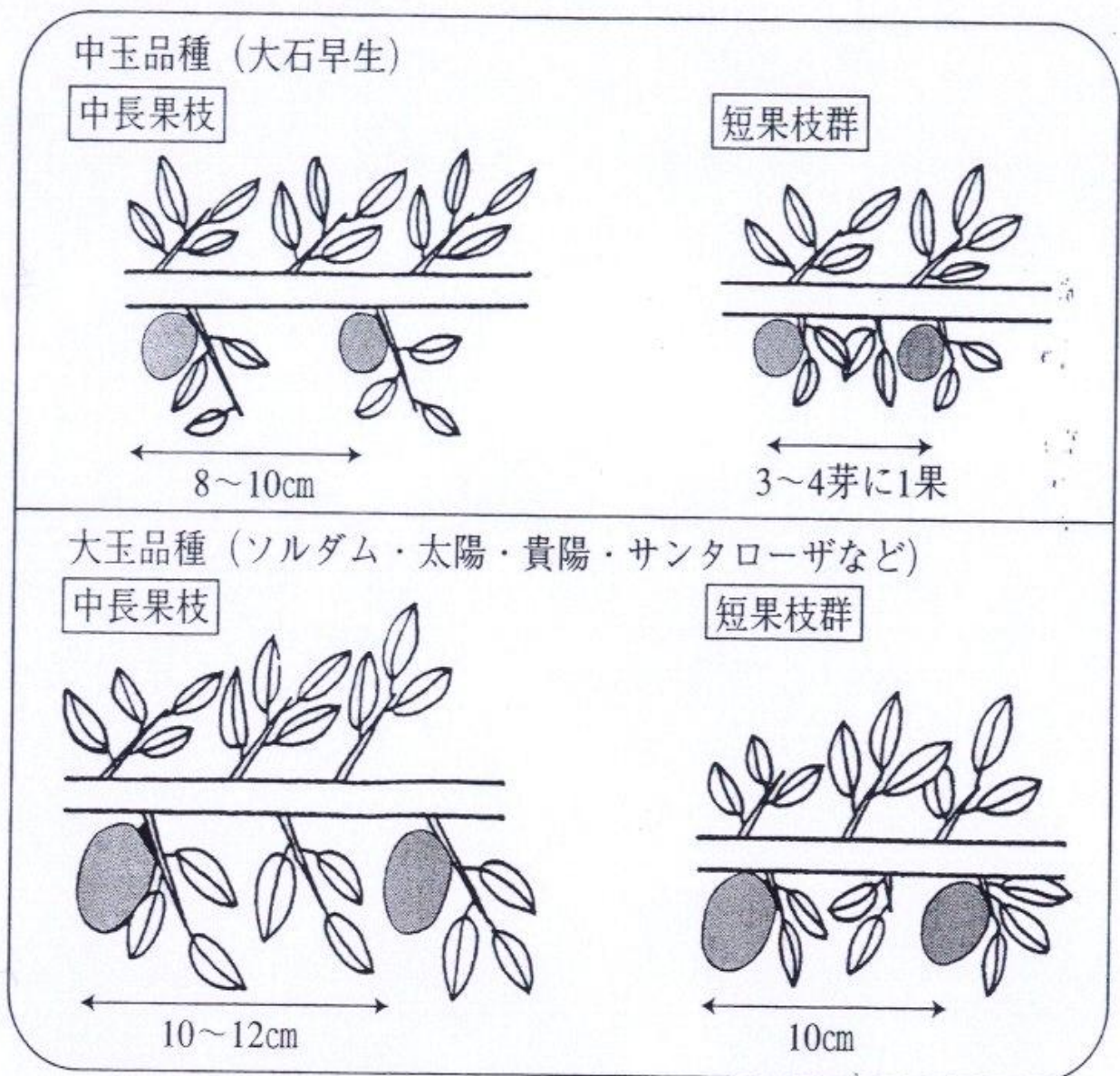
開花後50～60日後頃までに終了したい。果実1果当り20枚位の葉数が大玉生産に必要であり、品種によって果実の大きさが違う。大玉品種ほど果実1果当りの葉数も多く確保したい。なお、残す果実は実が大きく、緑色が濃く、縦長のもので果柄が太く下向きや横向きの果を優先的に残す。

① 紅りょうぜん・サンタローザ・ソルダム・貴陽・太陽・秋姫

中・長果枝で果実の間隔10～15cmで1果を目安にする。花束状短果枝で約10cmに1果を残す。

② 大石早生

中・長果枝で果実の間隔8～10cmで1果を目安にする。短果枝で3～4芽に1果を残す。



3. 新梢・樹体管理・・・プルーンの項に準ずる。

《病害虫》

4. 病害虫防除

①シンクイムシ類

- ・定期防除は、基本通り10日間隔で行う。
- ・また、被害果は、放置するとさらなる被害につながるため、発見次第適正に処分する。

②灰星病

- ・定期防除と共に、7月以降降雨が多い場合は、定期防除に記載がある通り、殺菌剤の加用をする。